

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

パコパンパ遺跡 (巻頭言に代えて)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008366

パコパンパ遺跡

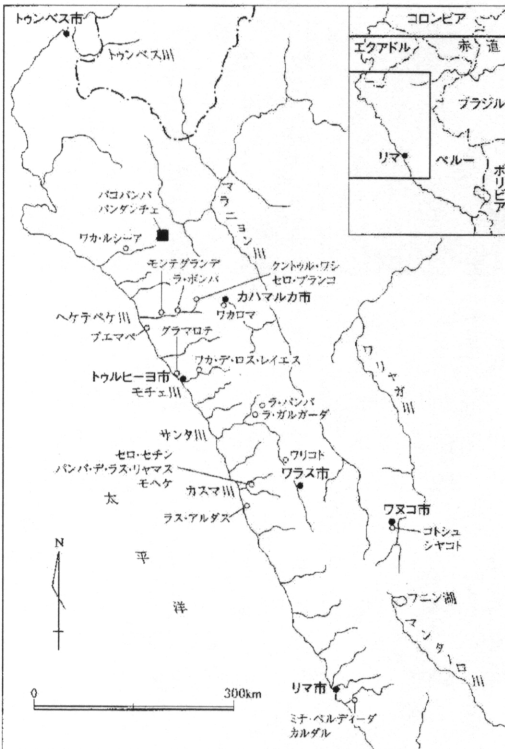
関 雄二

国立民族学博物館助教授

アンデス文明研究会顧問

先号で紹介したインガタンボ遺跡に続いて、今回はパコパンパ遺跡です。この遺跡は、インガタンボ遺跡の南、海拔 2,410mのアンデス山中にある形成期の祭祀遺跡です。アマゾン川の上流チョターノ川の左岸に位置します。アクセスはよいとはいえ、長年調査を行ってきたカハマルカ市から北に約 6 時間、途中チョタ市を経ていく方法、あるいは海岸からですとチクラヨ市からチャンカイ川をやはり 6 時間遡る方法とがあります。妙なところへ行きたがると、旅行代理店の方から苦情の寄せられることが多いアンデス文明研究会員の方でも、おそらくはまだ誰も訪れたことがない遺跡でしょう。

〔パコパンパ遺跡の位置〕



しかし、アンデス考古学、とくに形成期の社会に興味のある学生や研究者なら、チャンビン・デ・ワンタルやクントウル・ワシ同様、一度は訪れてみたい、調査をしてみたいと必ずや思うほどの有名な遺跡です。

この遺跡は、かつて国立サン・マルコス大学の考古学者が小規模な発掘をしてきました。というのも、遺跡の中核部を同大学が購入し、学生実習等に利用してきたからです。しかし、総合調査と呼ぶほどの規模も内容も持たず、とくに長くカハマルカ盆地やクントウル・ワシ遺跡を調査してきた私たちにとっては、編年や建築についていろいろと再解釈してみたい対象でした。

〔パコパンパ遺跡〕



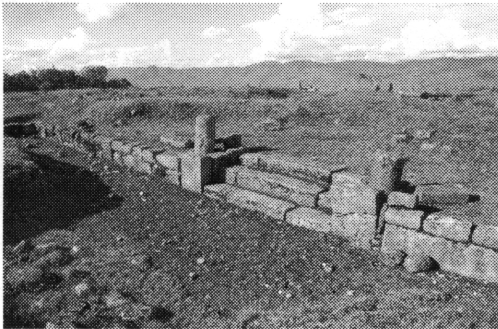
遺跡は、自然の尾根を利用し、2 段のテラスを築いている点で、クントウル・ワシによく似ています。下から 2 段目のテラスには、窪んだ方形の半地下式広場が見られます。興味深いのは、中心軸から少し北にずれている点です。

〔第1テラスにある半地下式広場の階段〕



さらに、このテラスの上には立派な大基壇がそびえ、その上には、半地下式広場やさまざまな建築が展開しています。いずれも石灰岩の切石を利用しており、成形の丁寧さはクントウル・ワシ遺跡以上といってもよいでしょう。クントウル・ワシ遺跡と同じような水路も多数見られます。この水路があまりに深いので、チャビン・デ・ワンタル遺跡にあるような回廊と考える人さえいます。また石彫もいくつか認められます。クントウル・ワシ遺跡ほど複雑な図像を描いた石彫は今のところ発見されていませんが、ヘビやジャガーなど形成期らしきものが目立ちます。

〔最上段にある半地下式広場と階段〕

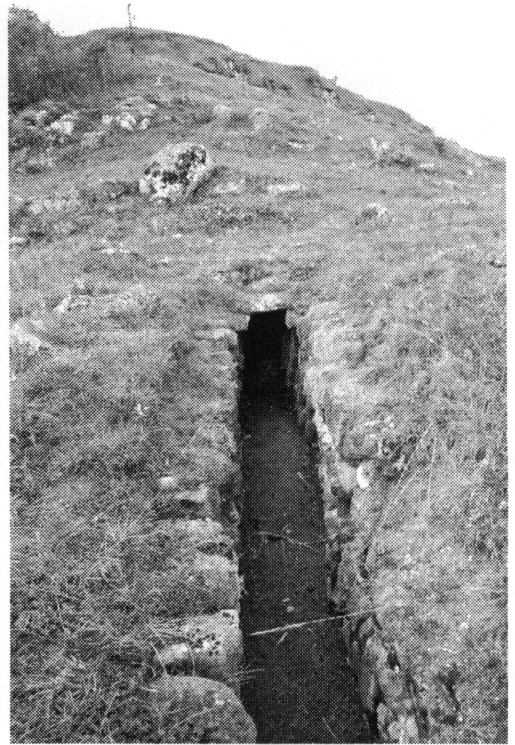


〔パンパの村の広場に置かれたジャガーの石彫〕



出土する土器は、主に2時期に細分されていますが、カハマルカ盆地のワカロマ神殿の時代、あるいはクントウル・ワシ遺跡の大神殿の下に埋もれたイドロ期にあたるものと、それより新しいクントウル・ワシ遺跡のクントウル・ワシ期、コパ期にあたるもののが確認されています。こうした土器の編年と建築との関係は不明ですから、発掘によって解明していかねばなりません。

(基壇を走る水路)



このように、やらなくてはならない仕事が山積しています。考えてみれば、クントウル・ワシ遺跡の調査は1988年に開始し、15年かかってようやく、立派な修復と保存が完了し、博物館も建ったのですから、パコパンパも10年以上かかると考えた方がよいでしょう。その頃は、私も定年を迎える頃です。つまり私にとっては、ライフ・ワークとなる遺跡なのです。それまでアンデス文明研究会が続いていて、その研究成果を是非お話ししたいものです。